新潟大学医歯学総合病院　　2015年３月

（標題：中野雄一 元病院長）

新潟医療人育成センターが完成しました

新潟県は深刻な医師不足を抱えており、加えて、離島や多くの中山間地域を抱える地理的条件から、医師の地域偏在も顕著となっていました。

「新潟医療人育成センター」は、このような県内医療の諸課題を解決するため、「新潟県地域医療再生計画（平成23年新潟県策定）」により設置が計画され、新潟県の出資により平成26年8月末、新潟大学旭町キャンパス内にオープンしました。

センターには、地域の医療を支える医師・看護師ほか多職種の医療人が、高度な医療技術・専門知識を身につける生涯学習の場としての役割が期待されています。文化財である医学部赤門の正面に位置する地上４階の建物に、260名収容のホール、セミナー室、シミュレーション室、模擬手術室・ICU・病室を備えています。

「赤門」の正面に設置された
新潟医療人育成センター

４階ホール（260名収容）

センターには各種医療用のトレーニングシミュレーターを設置しています。これらを用いて様々なトレーニングプログラムを開発し、今後、県内の医療関係者にお使いいただく予定です。

血管内治療トレーニングシミュレーター
（血管内治療、血管造影等の訓練）

高機能患者シミュレーター（左：乳児、右：成人）
（一般的症例のほか、危機的状況に特化した症例（シナリオ）を再現することができ、緊急処置が求められる現場での実際的な臨床訓練が可能）

センターでのトレーニングによって、新潟県の医療を支える臨床研修医、専門医、指導医、看護師や他のメディカルスタッフのスキルアップを図り、医療の高度化に対応できる人材となっていただくことを目指しています。県内の医療関係者の方々がこのセンターを自らの「学びの場」として、また、インストラクターとして後輩の指導に、そして、「語らいの場」、「道場」として積極的に活用いただくことが期待されています。

患者シミュレーターを使ってのトレーニングの様子

本院の理念・目標

◆理念◆

・生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成します

◆目標◆

・患者本位の安全で安心できる医療を提供します
・豊かな人間性と高い倫理性を備えた質の高い医療人を育成します
・研究成果を反映した高度で先進的な医療を実践します
・地域連携を推進するとともに地域の医療水準の向上に貢献します
・病院運営の適正化と効率化を促進します

患者の権利と責任

1．個人の尊厳が尊重され、良質で公平な医療を受けることができます
2．病状、治療、看護等について十分な説明と情報提供を受けることができます
3．他の医療機関の医師の意見（セカンドオピニオン）を聞くことができます
4．自分が受ける医療について自分の意思で決めることができます
5．プライバシーが尊重され、医療の過程で得られた個人情報は保護されます
6．医療者と協力し、自らの医療に積極的に参加する責任があります

マスコットキャラで医療安全を推進！

医療従事者による注射エラーを防ぐため、マスコットキャラクター（愛称：**ひなくるりさん**）を作成し、医療安全推進のツールとして活用することとしました。

注射エラーを防ぐための対策は、患者さんの名前や薬剤名など５つの重要事項確認（５Ｒ、Five Rights）が国際的にも知られています。

本院ではこの５Ｒについて病院職員に周知を行ってきましたが、マスコットキャラ“ひなくるりさん”を活用することにより、今後さらに５Ｒの浸透を図り、医療安全を推進することとしています。

Copyright (C) Niigata University 2014 All Rights Reserved

“ひなくるりさん”

5つのRight（注射実施時に確認が必要な事項）

Copyright (C) Niigata University 2014 All Rights Reserved

災害医療訓練を実施しました

平成26年10月18日（土）、新しい外来診療棟では初めてとなる、災害医療訓練を実施しました。

当日は、医師・歯科医師・看護師・技師・事務スタッフなど約120人が参加し、緊迫した状況の中、真剣に訓練に取り組みました。

訓練は、新潟市西蒲区で震度６の直下型地震が発生し、院外では、火災や事故が多数発生しているという想定のもと、外来エントランスホールを舞台に行われました。実際にトリアージ等を行う実践型訓練と、ホワイトボード等を現場に見立てて行う机上型訓練を組み合わせ、本学医学部保健学科の学生に患者さん役を演じてもらうなど、本番さながらの訓練となりました。

大規模災害時の対応を想定した今回の訓練に対して、参加者からは、「災害時の本院の役割が再認識できた。」、「発災時には、情報収集が重要であることを認識できた。」、「今後の検討課題を確認できた。」等の感想が寄せられ、非常に実りの多い訓練となりました。

本院では、今後も定期的な訓練を続けることで、新潟県における基幹災害医療センター（下記参照）としての使命を果たしていきます。

■基幹災害医療センターとは

厚生労働省が定めた災害医療対策事業等実施要綱により、災害時に多発する重篤救急患者の救命医療を行うための高度の診療機能を有し、被災地からのとりあえずの重症傷病者の受入れ機能を有するとともに、傷病者等の受入れ及び搬出を行う広域搬送への対応機能、自己完結型の医療救護チームの派遣機能、地域の医療機関への応急用資器材の貸出し機能を有する「地域災害医療センター」を整備し、さらにそれらの機能を強化し、要員の訓練・研修機能を有する「基幹災害医療センター」を整備することが定められています。

本院は、新潟医療圏の災害拠点病院（地域災害医療センター）であり、かつ、新潟県内の災害拠点病院（地域災害医療センター）の中で中心的な役割を果たす災害拠点病院（基幹災害医療センター）でもあります。

職員が模擬患者を演じて、
本番さながらの訓練となった。

病気の基礎知識 18　緑内障から生涯の「見る」機能を守るために

人間が受け取る情報の約80％は視覚から、つまり「目で見る」ことによって得ていると言われています。「見る」能力が低下すると、いわゆるQOL（生活の質；Quality of Life）やADL（日常生活の活動；Activity of Daily Life）が低下します。緑内障はQOL・ADLを害する目の病気の代表で、現在の日本では失明原因の第一位、世界的にも常に上位にランクされています。以前、多治見市で行われた大規模疫学調査の結果、日本人の約20人に一人が緑内障にかかっていました。さらに、この有病率は年齢とともに増加しますので、70歳代では実に約8～10人に一人が緑内障と診断されました。

緑内障は視野が障害される病気です。視野の中に見えにくい部分が生じ、それが次第に拡大していきます。視野の障害というのは症状を自覚しにくく、視力を障害する疾患に比べて、病気の軽度な時期に自覚症状で発見することが非常に難しいという問題があります。また、自覚症状が生じた時期にはすでに病期は進行した状態で、ここから治療を始めても元には戻せないという点も緑内障の難しい点です。

緑内障の約80％を占める原発開放隅角緑内障（POAG）という病型があり、通常、単に「緑内障」と称した場合にはこのPOAGを指しています。このタイプの緑内障は病気としては直すことは不可能で、生涯にわたって管理と治療をする病気と考えることが必要です。昨今の眼科診療の進歩は目覚しく、「緑内障、すなわち失明」という概念はすでに過去のものと言って良いと思います。緑内障の経過は個人差が大きく、残念ながら緑内障のためにQOL・ADLを害してしまう方はいらっしゃいます。多くの場合は早期発見と早期管理、治療、そしてその継続によって失明の危険性を減らすことのできる病気です。そして、より安全に、より確実に緑内障から生涯にわたるQOL・ADLを守るために最も大切なことは、定期的な検診やドックによって仮に緑内障になったとしてもより早期に発見することということを知っていただきたいと思います。

（眼科　教授　福地　健郎）

図１、正常の眼底

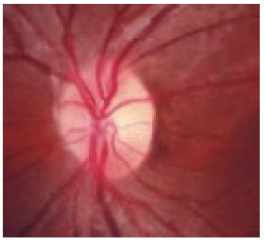
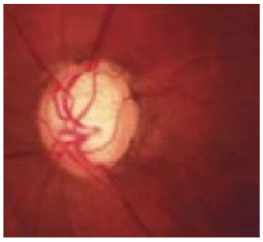


図２、緑内障の眼底



緑内障を早期に発見するために検診やドックで眼底検査を受けましょう。正常の眼底（図1）に比べて、緑内障の眼底（図2）では視神経乳頭の陥凹（凹み）が大きくなります。

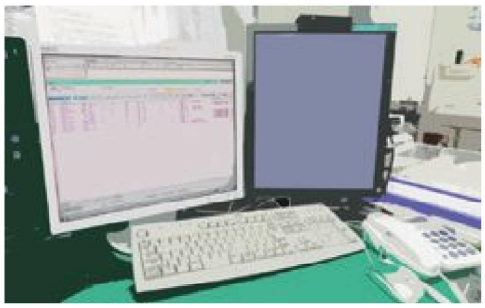
中央診療施設紹介 ⑰　医療情報部

医療情報部とは、電子カルテをはじめとした病院内ネットワークの管理を任せられている部門です。かつて、カルテはドクターが読みにくい筆跡で外国語や略語ばかりの文章を手早く紙に書いていました。また、レントゲン画像などの写真は、膨大な数の写真が入ったファイル棚の中から、事務方や看護師が目的の患者さんのものを探し出すという時代もありました。現代のカルテは電子カルテとなり、患者さんの病歴・検査結果・画像データ等を含む診療情報のほとんどがコンピューターの端末画面に集約化されて表示できるようになっています。これによって患者さんの情報が、主治医だけでなく医療スタッフ全員に伝わるようになり、１人１人の患者さんを病院スタッフ全員で支えるチーム医療の体制ができるようになったのです。

高機能である院内の医療情報システムは、病院内で非常に複雑かつ多岐にわたってネットワークをつくっています。病院内には各科診察室、入院施設のほかに、手術室、集中治療室、薬剤部、検査部、画像部門、会計（医事）、リハビリ、給食など数多い部門があり、部門の各々が管理コンピューターをもっています。それらすべての情報が電子カルテによって統合され、病院スタッフ全員が情報を共有できるようになっています。そのため、部門コンピューターの１つでも調子が悪いと、患者さんの診療に支障をきたしてしまう可能性があります。そういう意味では，複雑で繊細なシステムである電子カルテは病院の頭脳・神経といっても過言ではありません。医療情報部は，病院の基幹である大事なネットワークが健全に稼働するようメンテナンスと監視を常に続けています。

新潟大学医歯学総合病院では2年後に最新鋭の電子カルテシステムを導入する予定です。医療情報システムをより安定・充実させ、患者さんが安心して病院で診療を受けられるよう、これからも医療情報部は病院そして患者皆さんを支えていきたいと思っています。

（医療情報部　副部長　皆川　昌広）



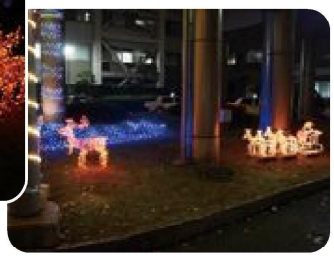
院内冬のイベントご紹介

ウィンターイルミネーション点灯式

夜空に灯る暖かい光で患者さんや来院されるご家族の心を癒し、少しでも勇気づけられることを願い、去る平成26年11月13日に、病棟玄関前においてウィンターイルミネーション点灯式が行われました。

平成18年から開始し、今年で９年目となるこのイルミネーションは、一般財団法人協和会の協力のもと、年末年始の病棟を彩る毎年恒例のイベントとして、患者さんをはじめ多くの方々に喜ばれています。

当日は、寒風が吹き荒れるあいにくの天候となりましたが、カウントダウンの合図で病院長や入院中の子どもたちによりスイッチが押されると、光の小川や動くトナカイなどLED約4,300個を使用したイルミネーションが一斉に灯り、集まった患者さんとそのご家族からは大きな拍手と歓声が湧き起こりました。



また、点灯式では、塚田協和会理事長から佐藤看護部長に、入院中屋外に出られない子どもたちのために絵本やDVDが寄贈され、イルミネーションとともに一足早いクリスマスプレゼントとなりました。

なお、今回は初めて、この点灯式にテレビ局が取材撮影に訪れ、例年以上の賑やかさを見せるなか、子どもたちが色とりどりのイルミネーションに目を輝かせる姿が当日の県内ニュースでも放映されました。

平成26年度のウィンター・コンサートを終えて

平成26年11月26日に多くの方のご協力のもとウィンターコンサートを行いました。昨年度に引き続き、新潟市秋葉区（旧新津市）出身のソプラノ歌手ゆうこさん、ピアニストで本学教育学部の教員でもある鈴木賢太先生、患者有志でピアノ伴奏を引き受けて下さった佐藤明子さん、そして、オカリナの赤澤宏平（筆者）の4人で演奏しました。101名の患者さんとそのご家族がご来場になり、口ずさんだり、目を閉じて聞き入ったり、思い思いに楽しんでおられました。

今回のコンサートでは、赤とんぼ、紅葉、雪、冬景色など、歌詞カードを配り、患者さんにも歌ってもらいました。演奏中、客席からの歌声はしっかりと聞こえましたので、和みのひとときになったと思います。この他、佐藤明子さんのソロ演奏ドビュッシーのアラベスク1番は、癒しの曲としてぴったりでしたし、鈴木先生とゆうこさんによるフィガロの結婚、ハバネラ、風をみたひと、オーソレミオも、プロの演奏らしく聞きごたえがあり、体にしみ入る音量でした。

今回もまた、ゆうこさんがコンサートの演奏曲の中から１曲、You Tubeにアップロードして下さいました。ゆうこさんは妊娠８カ月目でのご出演ということで出産前の最後のコンサートでした。お腹の赤ちゃんにもあのソプラノは届いたでしょうね。

年に数回のコンサートを実施させていただいております。ご出演下さる方がおられましたら、よろしくお願い致します。

院内行事実施検討部会長　　赤澤宏平

サンタさんの病棟訪問

クリスマス直前の平成26年12月19日にサンタさんが病棟にやってきました。

これは、職員がサンタやトナカイ、クリスマスツリーに扮し、各病棟の入院患者さん一人一人にクリスマスカードをお届けする毎年恒例の院内クリスマスイベントの一つです。

突然のサンタさんの訪問に驚きつつも握手や記念撮影を求める患者さんが多く、特に小児科病棟では、子どもたちが大喜びで迎えてくれました。

ほのぼのとした雰囲気の中、病棟全体がクリスマス気分に包まれた一日となりました。

新大病院たより「和」のバックナンバーは本院ホームページ
（http://www.nuh.niigata-u.ac.jp/about/koho.php）をご覧ください。
発行　新潟大学医歯学総合病院広報委員会
（お問い合せは総務課総務係　電話 025-227-2407,2408まで）